様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０２０９

研究課題名（和文）中国・ラオス・ミャンマー国境地域におけるチベット・ビルマ諸語の言語動態の解明

研究課題名（英文）Linguistic Dynamism of Tibeto-Burman Languages in China-Laos-Myanmar Border Area

研究代表者
林　範彦（HAYASHI, Norihiko）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：４０４５３１４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国・ラオス・ミャンマーの国境地域で話されるチベット・ビルマ諸語の現状を現地調査し、その言語データの記述・分析を行った上で、これらの言語を話す人々が歴史的にどのように接触し、また移動していったのかを探るものである。具体的には中国で話されるチノ語・アカ語、ラオスで話されるシダ語・プノイ語を調査した。その結果、チノ語の諸方言の歴史的変化の詳細が判明した。またデータ分析をさらにつめなければならないが、おそらくチノ語の補遠方言とアカ語ゲランホ方言、チノ語悠楽方言とラオスのシダ語が歴史的に近似した構造を持っており、シダ語はおそらくチノ語と分化した後にラオス側へ移動したのではないかと推定される。

研究成果の概要（英文）：This research project describes Tibeto-Burman languages spoken in the area surrounding China-Laos-Myanmar border through fieldwork and investigates the history of contacts among the people in this area and that of ethnic migration. During this research period I carried out linguistic fieldwork on the languages of Jino (Yunnan, China), Akha (Yunnan, China), Sida (Luang Namtha, Laos) and Phunoi (Luang Namtha, Laos). This project clarified the historical development of both dialects of the Jino language.
And from the field work I conducted, I briefly consider that the Buyuan dialect of Jino is similar to the Gelanghe dialect of Akha from the lexical viewpoints and the Youle dialect of Jino is similar to the Sida language in many respects. It can be assumed that the Sida people might have migrated from China into Laos after diverge from the Jino ethnic group, though it needs further analyses.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：チベット・ビルマ諸語　記述言語学　歴史言語学　言語接触　中国雲南省　ラオス　ミャンマー　東南アジア諸語

１．研究開始当初の背景

ラオス北部・ミャンマー北部と国境を接する中国雲南省南部地域にはタイ・カダイ系の言語を中心に、チベット・ビルマ諸語、フモン・ミエン諸語、モン・クメール諸語を話す民族がモザイク模様のごとく居住する。20 世紀の前半まではタイ系民族の地域国家が繁栄していたため、当該地域ではタイ系諸語が一種の地域共通語として機能していた。平地に主に居住するタイ系民族の一方で、山地に居住するチベット・ビルマ系および他系統の民族の言語はタイ系諸語の影響を受けつつも、自言語の体系を大きく崩すことなく保持してきた。

20 世紀後半以降、中国・ラオス・ミャンマーの国境が確定し、各国政府が直接的に諸民族を支配すると、各国の公用語(漢語・ラオ語・ビルマ語)の影響力が教育等を通じて諸言語に浸透し、高級語彙のみならず、基礎語彙や基本的な文法事項に至るまで構造変容が確認されはじめた。特に中国雲南省では漢語教育の徹底などで、若年層を中心に少数民族の母語と漢語の取り替えが見られ、言語系統の区別を問わず、少数民族言語の消滅が非常に危惧されている。

20 世紀初頭から当該地域の少数言語の記述がわずかながら存在し(Davis 等)、本研究が中心に取り扱う中国雲南省のチベット・ビルマ系言語に限定しても中国人の研究者が 1950 年代の後半から半世紀にわたり記述を進めてきた(馬学良、戴慶厦など)。

しかし、その総量は東南アジアの主要言語であるタイ語やビルマ語、ラオ語に比べて圧倒的に少ない。特に中国における研究はすべて従来の漢語[中国語]文法の枠組みを無批判に少数民族言語に適用しただけのものが多く、言語実態に即した記述がなされることはなかった。本研究で取り扱うハニ語格朗和方言は西田龍雄によりタイ国のビス語と言語的に近く、歴史的観点からも重要であると指摘されながら、未だに詳細な研究が存在しない。またラオス北部やミャンマー北部地域のチベット・ビルマ諸語に至っては、近年ようやくいくつかの有力な記述が現れはじめた段階であり(Sawada 1998, Kato 2008 等)、萌芽期に属すると言えよう。

代表者はこの現状に鑑み、中国雲南省南部に位置するチベット・ビルマ系言語のチノ語悠楽方言を中心に、言語の実態に即して包括的な記述を進めてきた。またミャンマー国境に近いラフ語南郎河方言、ハニ語格朗和方言の基礎語彙に関する予備調査、ラオス国境に近いチノ語補遠方言の基礎語彙・文例の予備調査を行ってきた。これまでほとんど記述調査も分析も、また他言語と比較・対照もされることのなかったこれらの言語は当該地域の民族移動や民族の接触を解き明かす重要な事実を含んでいる可能性がある。これらの言語を調査し、記述・分析を進め、国境をまたぐ他言語との比較・対照を言語接触論・類型論の観点から研究することは急務である。

以上の背景をもとに、本研究課題の遂行を始めることとなった。

２．研究の目的

ラオス北部・ミャンマー(ビルマ)北部と国境を接する中国雲南省南部ではタイ・カダイ系言語を中心に、多様な少数言語が話されている。しかし、それら少数言語は消滅に瀕する状況にありながら、記述言語学的および歴史言語学的研究が未だ不十分である。本研究はチベット・ビルマ系言語(特に中国雲南省のチノ語方言・ハニ語・ラフ語等)の記述研究を進める。更に隣接する東南アジア地域の同系統及び他系統(タイ・カダイ系、モン・クメール系等)の言語との比較研究を通じて、中国雲南省・ラオス・ミャンマー国境地域の言語間における地域言語学的特徴と言語動態・民族交流の解明を目指す。

３．研究の方法

本研究課題開始時において目指した研究方法を示す。

(a) [中国雲南省南部における現地調査とチベット・ビルマ系言語資料の整理・公開]

チノ語補遠方言・ハニ語格朗和方言・ラフ語南郎河方言の基礎語彙を現地調査により収集し、音韻・語彙については早急に整理・分析を施し、pdic 等を用いて電子データベースの構築とその公開を行う。各言語の基礎文例については 2000 項目以上のデータの整理を行い、分析する。

(b) [中国雲南省国境地域におけるチベット・ビルマ系言語の音韻・語彙比較研究]

代表者がこれまで中心に研究してきたチノ語悠楽方言の語彙データをはじめ、上記 3 言語のデータを並列して比較し、音韻対応から各言語の音韻変化の方向性を検討する。また語構成の観点から特に当該地域に頻出する 2 音節化の現象をはじめ、各言語における特徴を解明する。

(c) [東南アジア大陸部北部地域の諸言語との比較対照－基礎文法項目を中心に]

中国雲南省国境地域（主にシプソンパンナ[西双版纳]州）のチノ語・ハニ語・ラフ語の各方言の基礎的な文法項目(特に基本語順・名詞語構成・格標示・文の種類とその標示手法など)について、東南アジア大陸部北部地域で話されるチベット・ビルマ系、タイ・カダイ系、モン・クメール系等の言語資料を用いて比較・対照し、当該地域の言語における地域的特徴の解明を図る。

(d) [中国・ラオス・ミャンマー国境地域におけるチベット・ビルマ諸語の言語動態の解明]

チノ語・ハニ語・ラフ語の各方言の採集データを歴史言語学的観点から検討し、特にタイ・カダイ系言語・漢語雲南方言からの語彙借用・文法借用の影響を分析する。語彙面においては生態環境に関係する基礎語彙(農作物・動植物等)や形容詞・動詞の言語接触による影響を、文法については特に節末・文末形式の借用を検討する。また周辺のラオス・ミャンマー国境地域の諸言語のデータを他の研究者の協力を得ながら収集し、上記と相当の形式・現象と比較する。これらを総合し、中国・ラオス・ミャンマー国境地域におけるチベット・ビルマ諸語の言語動態を明らかにし、民族間の文化交流および民族移動の全容解明を目指す。

４．研究成果

[現地調査]

本研究課題期間において中国・ラオス・ミャンマーでの現地調査を以下の通り行った。

(1) 中国雲南省シプソンパンナ[西双版纳]州
2011 年 12 月 (チノ語補遠方言・アカ語ゲランホ方言), 2012 年 9 月 (チノ語悠楽方言とアカ語ゲランホ方言), 2013 年 3 月 (チノ語悠楽方言), 2014 年 2 月-3 月(チノ語悠楽方言と補遠方言)

(2) ミャンマー連邦シャン州
2012 年 3 月(アカ語・アク語・ラフ語・パオ語・ワ語・パラウン語・エン語)

(3) ラオス・ルアンナムター県
2012 年 8 月・2013 年 7-8 月・2013 年 12 月(シダ語・プノイ語・ランテン語)

本研究課題を補足する調査として 2014 年 3 月に富田愛佳氏(京都大学教務補佐員)を中国雲南省景洪市へタイ・ルー語(タイ・カダイ諸語)の現地調査に派遣した。主としてタイ・ルー語の名詞句構造の記述調査を行った。

[研究成果の総括]

以上の調査をふまえ、これまでに代表者が継続して研究してきた成果を統合し、整理と分析を行った結果、以下の 5 節に見る学術論文と口頭発表を行うことができた。現地調査の最終的な分析としては、おそらくチノ語の補遠方言とアカ語ゲランホ方言、チノ語悠楽方言とラオスのシダ語が歴史的に近似した構造を持っており、シダ語はおそらくチノ語と分化した後にラオス側へ移動したのではないかと推定される。しかし、ここではそれらの具体的な研究成果を総括しておきたい。なお、5 節の研究成果への言及は、雑誌論文については(論#), 口頭発表については(口#)のように表示する。例えば、雑誌論文の 3 に言及する場合は(論#3), 口頭発表の 4 に言及する場合は(口#4)のように表す。

[1] チノ語悠楽方言の共時的記述研究

本研究期間でもこれまでの研究成果をふまえ、チノ語悠楽方言の共時的研究、とくに文法における諸問題について更なる探究を行った(論#1, #2, #4, #6; 口#6)。大きく分類すると、(a)節連結と文の問題、(b)動詞の用法、(c)語類の問題にまとめることができる。

(a)[節連結と文の問題]

チノ語悠楽方言も他の諸言語と同様、節と文の記述はもっとも難度の高い部類に入る。論#6 ではこの言語の従属節末に現れる助詞を形式ごとに分類し、その機能との対応関係を論じた。節の意味的な連続性を単線的尺度に落とし込んで分析した結果、チノ語悠楽方言においては「理由節」「時点節」「条件節」の順序で機能が連続していることが判明した。

また論#2 では発話行為に基づく文の分類を行った。チノ語悠楽方言は述語の統語範疇に応じて「動詞述語文」「形容詞述語文」「名詞述語文」を持つ。発話行為に基づく文の分類としては「平叙文」「真偽疑問文」「疑問語疑問文」「命令文」「勧奨文」「祈願文」が見いだせるが、そのうち「動詞述語文」「形容詞述語文」「名詞述語文」すべてに見いだせるのは「平叙文」「真偽疑問文」「疑問語疑問文」の 3 種である。またこのいずれも文末助詞によって標示される。形容詞述語文は動詞述語文と名詞述語文の中間的な性格を持つが、疑問文末の助詞の振る舞いは名詞述語文に近いことがわかった。

(b)[動詞の用法]

本研究課題ではこれまでの研究の継続でチノ語悠楽方言の存在動詞と移動に関係する動詞についての分析を進めた。論#4 では 4 種の存在動詞 tʃə42, tʃa35, n55tɔ44, çu42 について検討した。これらの使い分けには有生性、一時性が関与していると考えられる。tʃə42 は有生名詞とのみ、tʃa35 は無生名詞とのみ共起する。n55tɔ44 と çu42 はそのどちらとも共起しえる。また n55tɔ44 は明らかに一時的な存在を含意する。また存在動詞は存在構文に用いられることは当然であるが、同時に格標示や名詞項の認可から所有構文としても解釈できる場合がある。tʃə42 と tʃa35 は所有構文としても用いられうる。

また口#6 ではチノ語悠楽方言の移動に関する動詞の振る舞いについて分析を試みた。日本語の「行く」に相当する動詞として le55, je55, ja42 が、「来る」に相当する動詞として lɯ55, lɔ42, la55 が存在する。このうち、単独で用いることができるのは le55, je55, lɯ55, lɔ42 である。ja42 と la55 は動詞連続構造の第 2 位以降の位置に置かれ、アスペクチュアルな意味(起動相など)を表しうる。今後さらに分析を進め、論文として発表をしたい。

(c)[語類の問題]

加えて語類の問題として、形容詞と名詞句構造の記述を試みた。論#1 ではチノ語悠楽方言の形容詞の形態統語的特徴と意味的分布について記述した。形容詞はその性格から動詞と名詞の 2 類と区別するのが難しい言語も多いが、チノ語悠楽方言は引用形の形式([a-/ la-/ jɔ- +語根])によって判断することが可能である。形態統語的特徴から析出された形容詞は Dixon (2004, 2010) の言う Dimension, Age, Colour, Physical Property, Difficulty, Quantification, Position のグループに分布する。

[2] チノ語悠楽方言の通時的研究

かねてより代表者はチノ語悠楽方言の通時的研究を進めているが、本研究では特に借用語の問題について口#2 で取り扱った。

チノ語悠楽方言はタイ・ルー語と漢語雲南方言より非常に大きな影響を受けている。タイ・ルー族がチノ族の住むシプソンパンナ州を統治していた 13 世紀から 20 世紀前半にかけてはタイ・ルー語が地域共通語となっていたと考えられる。チノ語悠楽方言は固有の音韻体系・音節構造にあわせながら、動植物名や形容詞などを借用し、現在に至っても使用されている。一方、20 世紀後半以降は同地域においては漢語が主要言語となっており、チノ語悠楽方言も新出語彙を中心に大量の借用語が導入されている。現時点では語構成のパターンを漢語のそれに転換するほどの借用はなされていないが、今後継続調査をしながら推移を確認して

行く必要がある。

[3] チノ語補遠方言の共時的記述研究

チノ語補遠方言は基礎文例補充調査を行った上で、(a) 音韻体系、(b) 格標示の記述を試みた。

(a) [音韻体系]

論#5 は漢語を用いて執筆した。チノ語補遠方言は悠楽方言に比べて音素が少ない。特に摩擦音は無声音のみ、鼻音・側面音は有声音のみが存在する。これはこれらの調音様式において声の対立が存在する悠楽方言とは対照的である。同論文の末尾には付録としてチノ語補遠方言の中核語彙 150 語を掲載した。今後はこれをさらに発展させ、音韻論と基礎的な文法特徴を整理した語彙集の出版を計画していく。

(b) [格標示]

口#4 ではチノ語補遠方言の格標示について概要を述べた。現時点では悠楽方言に比べて補遠方言はわずかな後置詞しか存在せず、有標の形式は 3 個のみである。そのため、各後置詞が表しうる意味役割の範囲は広い。=ɛ は主語・時間副詞・道具格を表す。=a は属格を表す。=xɤ は奪格・比格・共同格・併置を表す。このほか、特に代名詞において最終音節の声調交替によって斜格を標示できる。口頭発表後、さらに現地調査をする機会に恵まれたので、新たなデータを追加して、研究論文として発表し直したい。

[4] チノ語補遠方言の通時的研究

チノ語補遠方言の通時的研究については a) 声調の歴史的発展、(b) 介音の推移を論じた。

(a) [声調の歴史的発展]

論#3 ではチノ語補遠方言の声調を共時的に整理し、それが悠楽方言および同系である他のロロ・ビルマ諸語とどのように対応しているのかを通時的に考察した。その結果、チノ語補遠方言は声調の調値も含めて悠楽方言に酷似した対応を示すが、祖語の抑止音節の変化では、チノ語補遠方言は 55 調に合流したと見なせる。

(b) [介音の推移]

口#5 ではチノ語補遠方言の音節構造における第 2 位に位置する介音の歴史的変化について考察した。悠楽方言と同系の他のロロ・ビルマ諸語と比較研究を行った結果、多くの例でチノ語補遠方言の介音は-j-に合流している状況が描き出された。一方で、介音-j-が補遠方言独自の変化として挿入されたり、反対に不規則的に消失する現象も判明した。これらの状況を総合すると、チノ語補遠方言の介音は頭子音の調音位置に応じて変化した時期が異なることがわかった。

今後は悠楽方言との比較を積極的に進めた上で、ロロ・ビルマ祖語からチノ祖語への変化の過程で生じた介音の推移を記述する。そして、チノ祖語から各方言に対して生じた変化を検討して、研究論文として発表したい。

[5] アカ語ゲランホ方言の共時的記述研究

アカ語ゲランホ方言は調査データに基づき、(a) 音韻体系、(b) 格標示の記述を試みた。

(a) [音韻体系]

すでに東南アジア大陸部北部地域に分布するアカ語に関しては Hansson が調査している。その中で Hansson は雲南省に分布するアカ語の語彙を公開している。しかし、管見の及ぶところ、音素体系が不明である。またタイのアカ語との対比で記述される傾向があり、この点は注意が必要である。

代表者は口#3 でシプソンパンナの勐海県で話されるゲランホ・アカ語の調査データに基づき、音素体系を整理した。その結果、Hansson の資料とは異なるデータが多く見つかった。また音節を単位とする声調のほかに、文法現象に関与する声調があることがわかった。

(b) [格標示]

ゲランホ・アカ語については語彙比較の面でこれまでにも先行研究が存在する。しかし、文法分析についてはこれまでにはおそらく存在しないと考えられる。代表者は調査資料に基づき、ゲランホ・アカ語の文法研究の第一歩として格標示の問題を口#1 で扱った。ゲランホ・アカには代名詞の最終音節における声調交替のほかに、後置詞による格標示が可能である。具体的には =nɛ44,

=ɛ44, =ɤ44, =ɤŋ44 が存在する。=ɛ44 と =ɤ44 はそれぞれ道具格と所有格という個別の機能を持つが、他方=nɛ44 と =ɤŋ44 はそれぞれ多機能である。=nɛ44 は共同格・主格などを表し、=ɤŋ44 は対格・被動者・受益者などを表す。今後はデータをさらに整理し直して、論文の形式で発表したい。

５．主な発表論文等

以下、発表論文・口頭発表はすべて代表者のみ。

〔雑誌論文〕（計 6 件）

1. 2014. Youle Jino Adjectives and Their Semantic Mapping. 『神戸外大論叢』第 64 巻第 3 号: 9—22. 神戸: 神戸市外国語大学研究会.
2. 2013d. 「チノ語悠楽方言の文の種類」澤田英夫(編) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』pp. 283—319. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 2013c. A Sketch of Buyuan Jino Tones and Their Development. 『アジア言語論叢』Vol.9: 19—36. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
4. 2013b. Existential Verbs in Youle Jino. 『神戸外大論叢』第63巻第2号: 141—161. 神戸: 神戸市外国語大学研究会.
5. 2013a. 「基诺语补远话音系简介」太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集刊行会(編)『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』pp. 383—393. 東京: 好文出版.
6. 2012. 「条件節・理由節・時点節の連続性について— チノ語悠楽方言を例として—」『地球研言語記述論集4 大西正幸博士還暦記念号』pp.165-184. 京都: 総合地球環境学研究所.

〔学会発表〕（計 13 件あるが、本報告書ではそのうち 6 件のみを掲載）

1. 2013b. A Preliminary Sketch on Gelanghe Akha Relational Morphosyntax. Circulated at the 19th Himalayan Languages Symposium, Australian National University (Canberra, Australia/ 6th, Sept., 2013).
2. 2013a. Loanwords in Youle Jino. Circulated at the 23rd Annual Conference of Southeast Asian Linguistics Society (Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand/ 29th, May, 2013).
3. 2012d. A Phonological Sketch on Gelanghe Akha (Hani) --- A Preliminary Report ---. Circulated at the 6th International Conference on Yi-Burmese Languages and Linguistics, Southwest Nationalities University (Chengdu, China/ 2-4, November, 2012)[発表は漢語を使用].
4. 2012c. A Preliminary Sketch on Buyuan Jino Relational Morphosyntax. Circulated at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Nanyang Technological University (Singapore/ 26th, October, 2012).
5. 2012b. 「チノ語補遠方言の介音の推移とその周辺」(日本言語学会第 144 回大会口頭発表、東京外国語大学、2012/6/16).
6. 2012a. Motion Verbs in Youle Jino ---‘come’ and ‘go’---. Circulated at the 22nd Annual Conference of Southeast Asian Linguistics Society (Agay, France/ 31th, May, 2012)

６．研究組織

(1)研究代表者

林　範彦（HAYASHI, Norihiko）
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40453146

以上。